

72

幕末・明治前期来日フランス人医師の動植物研究

誌上発表

——動植物環境馴化協会での活動——

須長 泰一

伊勢崎市

幕末から明治前期にかけて設立された官営産業施設の中に、フランス人技術者が招聘された横須賀造船所、富岡製糸場、生野鉱山がある。これらの施設にはフランス人医師が常駐していたことはよく知られ、近代産業技術導入におけるフランスとの密接な関係を背景にして、この時期に来日したフランス人医師は十数名に及ぶことが確認されている。これらフランス人医師は医療以外の分野でも、多様な活動の足跡を残しているが、中でも日本の動植物に関心を示し、その研究に取り組んだ医師が少なくないことを指摘できる。『日本植物目録』を著した横須賀造船所勤務のP・A・L・サヴァチュエはその代表であり、このほかにも動植物研究に取り組んだ医師を認めることができ、動植物環境馴化協会(La Société Zoologique d'Acclimatation)の会員であった3人の医師も、日本での研究活動の成果を発表していた事実が確認できたため、今回は彼らの経歴とその研究概要について紹介する。

動植物環境馴化協会は、1854年2月、世界各地の動植物研究を目的にして、パリで設立されたフランスの学術団体である。名称は何度か変更されているが、現在もその活動は継続されている。日本在留会員としては、1859年にD・D・ベンクール初代駐日公使の入会が最初であり、L・デュリー、P・J・ムリエ、J・P・I・ヴィダルらの医師も所属したことが把握されている。

L・デュリー(1822~91)ブッシュ＝デュ＝ロース県出身。マルセイユ大学医学部卒業。函館で設立が計画された病院に招聘され、1861年来日したが、その計画が頓挫したため、長崎フランス領事館の副領事に就任した。その後、長崎・京都・東京でフランス語教育に携わり、1877年に帰国した。動植物環境馴化協会には1863年に入会し、調査報告「日本から輸出された動植物産品についての研究ノート」(1868)がある。

P・J・ムリエ(1827~?)ドローム県出身。1850年にモンペリエ大医学部で博士号を取得。1864年来日。横浜居留地で開業医をした後、名古屋洋学校、東京外国語学校、司法省明法寮等で、フランス語や法律を教え、1880年に帰国した。動植物環境馴化協会には1864年に入会し、一時帰国した1866年2月の例会で「日本の養蚕について」を報告したほか、日本の養蚕書を紹介した「ナカジマテイゾウ・ブンエモン著『奥州本場養蚕手引』」(1867)、「清水金左衛門著『養蚕教弘録』」(1868)についての翻訳がある。

J・P・I・ヴィダル(1830~96)オード県出身。1848年リール軍教育病院で研修後、1853年にモンペリエ大学医学部で博士号を取得。陸軍軍医として上海、ベトナム、アフリカで勤務した後に除隊し、1872年来日。迎曦塾でフランス語教師、私立新潟病院で医学教師、富岡製糸場と横須賀造船所で勤務医、横浜フランス公使館附医師を務めたが、1878年に帰国した。動植物環境馴化協会には1874年に入会し、「竹の使用についての研究ノート」(1874)、「日本の有益な動植物」(1875)、「コノファルス・コンヤク日本の食用植物としての栽培と使用」(1877)、「野菜種の環境馴化に対する成否に関する主要条件の考察」(1879)、「日本の野蚕に関する研究ノート 飼育と有用性」(1881)等の調査報告を発表しているほか、1879年2月の例会において、日本で実施した旅の概要と日本の三種類の漆木、魚、昆虫等について報告を行った。また、1885年の会員通信には、日本在留のF・サラザンから日本の漆と蓮の種子が送られたことを知り、ヴィダル自身も友人のF・エヴラール神父に同じ種子の送付を依頼していたが、手違いにより未着で、種子を蒔く時期を失する可能性があり、サラザンの種子を譲り受けることを依頼する手紙が掲載されている。

さらに、長崎に在留したオランダ人医師ボンベも動植物環境馴化協会の所属会員であり、日本の野蚕(ヤママユ)についての例会報告が確認されている。